

腫瘍が手術で治せる非常に希なケースだからでした。私は手術を受け、おかげで今は元気です。これが私の最も死に近づいた経験です。今後数十年は勘弁ですね。

それを通して、死がただの概念だった頃より、確信を持つて言えることがあります。

「誰も死にたくはない」

「天国に行きたい人でもそのために死のうとはしない」

「しかし死は全ての人の終着点であり、誰も逃れたことはないし、今後もそうあるべきだ」

「なぜなら、死は生命の最大の発明なのだから」

「死は古き者を消し去り、新しき者への道をつくる」

ここでの「新しき者」は君たちです。しかし、そう遠くないうちに……君たちも「古き者」となり、消えてゆきます。大げさですみません。しかし、紛れもない事実です。あなたの時間は限られています。無駄に他人の人生を生きないこと。ドグマに囚われないでください。それは他人の考え方につき合った結果に過ぎません。他人の雑音で、心の声がかき消されないようにしてください。そして最も大事なものは、自分の直感に従う勇氣を持つことです。直感とは、あなたの本当

に求めることをわかっているものです。それ以外は二の次です。

スピーチは以上です。いかがでしたか？日本なら社会に羽ばたく学生たちの栄えある卒業式に『死』の話をするなんて、なんて奴だ！縁起でもない！と怒り出す人がいます。でも、ここで述べられていることのひとつひとつが、私たちがわかっているように実は全然わかっている、因果の道理を分かりやすく説明してくれているような気がするのです。人生は苦であるとお釈迦様はおっしゃいました。生老病死の四苦も、老病死から逃れる方法は生まれてこないこと以外にはありません。

此あれば彼あり

此なければ彼なし

此生じれば彼生じ

此滅すれば彼滅する

私たちの時間は限られています。その大切な時間を、お金、土地、家、人間、名誉、地位、その他もろもろの無常なものにとらわれ、抛り所としてああでもないこうでもないという文句を言いながら暮らしているのが誰であろうこの私だったのです。

そのような生き方ではなく、無常でないもの（常住なるもの）をあて頼りに生きなければなりません。それが、どんなことがあっても私を捨てないとお誓いくださった阿弥陀様のお喚び声に応えていく生き方です。親鸞聖人は阿弥陀様のみ教えを南無阿弥陀

仏の六字として受けとめて、私たちに伝えてくださったのです。摂取不捨（おさめとつて必ず捨てることがない）という働きを、私たちはアミダといただくのです。私はいつ病を得て死にゆくのかわからない無常の身でありながら、わずか数10年のいのちがすべてではない、もつともつと大きな生命の中、如来様のお慈悲の中に生かされていたことをお互いによろこばせていただくような毎日でありたいものです。どうか朝夕は家族全員がお仏壇の阿弥陀様に手を合わせてください。悲しいことも、苦しいことも、つらいことも、もちろん楽しいことも、阿弥陀様と一緒にです。

「御正忌のご案内」

日	14時〜	19時〜
15日	大逮夜	初夜
(水)	正信偈	十二札
	法話二席	御伝鈔拜読
		法話一席

福井市教応寺住職

ご法話

本願寺布教使

奥田 順誓師です。

☆温かいおぜんざいが、今年も昼夜ともにふるまわれます。ご家族そろってお参りください。心よりお待ちしております。